



思いやりのある看護を目指して

看護部の看護・介護職員では、看護・介護職員が連携、協力しあって看護と介護の質の向上を図り、誇りと自覚を持ってより良いケアを患者さんに提供するために「教育委員会」を組織しています。

この「教育委員会」では、毎月1回、会議を行い、講演会や研修会を企画しながら看護および介護業務の改善を行っています。

今回は、その活動の一部を紹介します。

毎年、年度末の3月になると研究成果を発表する研究発表会を行っています。

昨年の8月に医療行為や医学的調査研究に倫理的に配慮を図り、医療を受ける患者様の人格を尊重し人権を擁護するために院内に倫理委員会を設置しました。この倫理委員会には、区長会長の石原省三さん（藤田）、和水町地域婦人会長の菊川ヨリ子さん（前原）にも委員に入らせていただいています。

昨年度は、次の3つの調査研究について倫理委員会で承認をいただき、調査研究を行いました。

- ①患者と家族にとってよりよいエンゼルケアを目指して～マニュアル作成によるケアの統一
3階看護師 満永 弘江
 - ②高齢者の安楽な入浴援助方法の検討
4階看護師 平山美由紀
 - ③訪問看護利用者へのアロマセラピー効果について
訪問看護師 平川 陽子
- 今年3月に行った研究発表会では、調査研究から得られた結果や課題について、参加した看

護師からたくさんの質疑があり、活発な意見交換を行うことができました。

また、当院では、九州看護福祉大学、玉名女子高等学校、鹿本医師会看護学校、城北高等学校の4校から看護実習の受け入れを行っています。

各現場には、実習指導者の資格を持った看護師を配置していますが、看護職員の全員が指導者という考えのもと指導を行っています。これからの未来に必要な看護師を目指している学生たちです。常々、看護部の看護師には、「オタオタしているところも悩んでいるところも含めて、いつものケアの様子を見せなさい。」と、伝えていきます。私たち看護師が、現場での自然な姿を見せることこそ、学生が得るものは大きいのではないかと考えているからです。

これからも看護部一同、地域の病院として地域住民に思いやりのある看護を提供していきたいと考えています。



歴史調査の楽しみ方

江栗城跡

21

大田 幸博

（元・菊水町史編集委員会副委員長）

熊

本城内には、120の井戸があつたとされます。実際、城は、籠城のイメージが強く、水の確保は、生命維持のために、不可欠なものになります。

当然、この事は、県内で533を数える中世城にも当てはまる筈ですが、不思議な事に、残存している井戸の数は、驚く程、少ないのです。最も、当時は、城内に、幾つもの大きな水甕を持ち込んでいた事が、発掘調査の結果、明らかになっています。

実際、備前甕や須恵甕の破片が、数多く、出土しています。城内の谷間に、岩清水の個所を確保していた事も分かっています。和水町内では、国指定史跡の田中城にも、井戸の話を聞かれません。しかし、例外的に、町内の城跡には、井戸と推定される大穴が4基も残っており、異例な事として、注目されます。

その内の一つが、この江栗城跡にあります。先月号で、少し触れましたが、今、「城尾」地区で、確認することが出来ます。水は、溜まっていますが、井戸と伝えられてきました。私は、町史編纂時代に、一度、竹藪の中で実見しましたが、今回、周りの枯竹や倒竹が片付けられると、それは、見事な井戸でした。

広い面積の城尾は、南北方向に、何段も造成されていますが、4段目の平場に存在します。それも、3段目の法面を掘り込む

形で掘り下げられています。

平面形状は、長円形で、南北方向に長軸の向きがあります。南側寄りであり、すばまった形になります。挿鉢状の穴で、深さは、2.8m、上場は、長径10.4m、短径6.8m、下場は、長径6.6m、短径4.2mの大きさです。井戸壁にあたる3段目の法面は、急峻に削り落されています。形や規模は、志口永城跡の井戸に、良く似ており、両城跡の関連性が、伺われます。



他の城跡の井戸は、既に、調査を終えています。類例が、日平城跡と志口永城跡に残っています。状況は、既に、調査報告書と広報で報告済みですが、資料比較のために取り上げます。

日平城跡は、標高が34.22mの本格的な山城ですが、山頂直下の平場と、少し離れた南東側の尾根筋に、計2基の井戸が残っています。資料説明に際し、前者を井戸1、後者を井戸2とします。

〔井戸1〕常時、水が溜まっており、掘り抜き井戸の様な形をしています。城の井戸と伝わり、戦前まで、雨乞い祭りが行われ、定期的に井戸さらいも実施されていました。

調査の結果、雨水を溜めた貯水池である事が判明しました。深さ2.2m、上場は長径3.8m、短径3.2m、下場は長径2.6m、短径2.5mの大きさです。

〔井戸2〕水は、溜まっていますが、「五郎池」と呼ばれ、馬に、水を飲ませた池と伝われます。深さ1.8m、上場は長径4.0m、短径2.5m、下場は長径4.0m、短径1.5m、井戸1とほぼ同じ大きさで、形状は、とても似通っています。

この2基の井戸は、高山に位置する山城に設置された井戸として、注目されます。



日平城跡 井戸1



日平城後 井戸2

4本目の井戸は、志口永城跡に残っています。最高所が、標高83.5mの単郭形式の城跡で、北東側の張り出し小尾根に井戸があります。階段状地形の8段目に掘り込まれています。井戸の伝承はありませんが、形状から間違いのないと思われ、平面形状は、長円形で、東西方向に長軸の向きがあります。上場は、長径9.5m、短径6.8m、下場は長径5.5m、短径2.6mの大きさです。

今月は、江栗城跡・日平城跡・志口永城跡に残る井戸の計測値を並べてみました。文中にも記しましたが、江栗城跡と志口永城跡の井戸が、形も大きさも極めて似通っている事は、注目に値します。やはり、中世城は、群として捕らえる必要があります。菊水の江田地区から植木に向かう県道沿に並ぶ城跡群にも同じ事が言えます。



志口永城跡 全体図

今月は、江栗城跡・日平城跡・志口永城跡に残る井戸の計測値を並べてみました。文中にも記しましたが、江栗城跡と志口永城跡の井戸が、形も大きさも極めて似通っている事は、注目に値します。やはり、中世城は、群として捕らえる必要があります。菊水の江田地区から植木に向かう県道沿に並ぶ城跡群にも同じ事が言えます。